

スパゲッティもちゃんこか——相撲の食に関する文化人類学的考察

寺本新乃

日本の大相撲といえば、髷を結って禪を締めた力士の姿のイメージと共にちゃんこが想起されることも多いだろう。日本国内では、相撲の食と言えばちゃんこという認識は共通理解と呼べるレベルである。

本論文は、巨漢と呼ぶにふさわしい力士の体の基礎とされ、大相撲の特異な文化の1つであるちゃんこに着目し、大相撲においてちゃんこを介して紡がれる社会関係を明らかにすることを旨とするものである。

これまでの相撲に関する研究は、その歴史に注目したものが多く、神話や古事にに基づき相撲の起源を探る試みや、現在につながる大相撲興行の成立までの経緯を明らかにする通時的視点に立った研究が行われてきた。その一方で、人類学の立場から行われた相撲研究は、その文化的・社会的側面に注目したものが多く、個々の力士の相撲実践を明らかにするために力士の身体に着目する研究など共時的研究も行われている。しかし、ちゃんこがそうした視線を浴びることはこれまでほとんどなかった。大相撲に関する研究の中でちゃんこに注目した研究は、栄養学的立場をとるものが多く、ちゃんこの内容と相撲部屋の生活リズムを批判し、相撲部屋に対して栄養管理を求める傾向がある。

本研究は、上記のいずれの立場の研究も対象としてこなかった、ちゃんこの文化的・社会的作用に注目する点に独自性がある。本論文では、次の3つの問いを明らかにすることを旨とする。(問1) 大相撲の歴史のなかでちゃんこはどのような変化をたどったのか。(問2) ちゃんこを介してどのような社会関係が生じ、維持されているのか。(問3) 大相撲におけるちゃんこはどのようなものか。ちゃんこは力士の体作りの基礎だから疎かにしてはならないものだという発言は、大相撲関係者にも相撲ファンにもよくみられるものである。実はちゃんこはいわゆるちゃんこ鍋だけを指すのではなく、例えば一般の家庭でもよく食べられるスパゲッティも相撲部屋ではちゃんことされる。提供される料理は一般家庭と変わらないにもかかわらず、大相撲ではわざわざちゃんこと呼んで重要視することの意味は漠然としているように思う。筆者は、栄養摂取以外のちゃんこの側面を明らかにすることこそ、大相撲の数値などで捉えられない不可量の部分に迫る方法のひとつであると考えている。

本論文は、4つの章とまえがき、あとがきで構成される。まえがきでは、本研究の背景を示す。第1章では、まず通時的視点に立つ先行研究を概観し、本論文における用語の使用法とそれが指す意味を定義した上で、ちゃんこの文化的・社会的側面への視線の不足とこれを検討する意義を指摘する。そして、考察に用いる理論として共食とつながりの理論の先行研究をレビューする。第2章では、フィールドワークを通して目にしたちゃんこの実態を描き、ちゃんこを介して結ばれる相撲部屋内部の社会関係を分析する。第3章では、相撲部屋の枠を超えて紡がれる社会関係とそこに介在するちゃんこの作用を検討する。第4章では、視座をちゃんこに置くことで見えてくる大相撲の世界を描く。あとがきではこれらの論考を包括的にまとめ、本論文の結論を述べる。